※PDF閲覧ソフトを「見開き」に設定されている場合、
ページは左→右の順で表示されます。

目次

第一章　童貞義弟への手ほどき……　三
第二章　セックス嫌いへの手ほどき……　四一
第三章　兄嫁の手ほどき（一部、体験版に収録）……　七一

登場人物紹介

東海林　優子（しょうじ　あやこ）　兄嫁。たおやかで優しい三十路妻。
片倉　涼子　（かたくら　りょうこ）工学部の院生。女の自信が薄い二十代。
東海林　誠二（しょうじ　せいじ）　主人公。大学四年生。童貞。

第三章　兄嫁の手ほどき

八月中旬。その日も暑かった。太陽がギラギラと照りつけている。そんな中で。

「あンッ、いいわっ、誠二さんそこっ、そこをもっとぉ～」

東海林宅にて。家を守る妻優子と、義弟の誠二が縁側でまぐわっている。

庭に面していると言うのに二人とも全裸である。肉メロンに劣らない、脂が乗った豊満な巨尻をむんずと掴まれながら、兄嫁は義弟にガツンガツン突かれている。

結合部の直下には愛液がポタポタと垂れている。肉穴内部から溢れているものが義弟の肉鰓で掻き出されているのだ。できている水溜りは小さくない。

「義姉さん、そんなに声を出したらご近所に聞こえるよ」

「大丈夫ですよ。皆さん帰省してらっしゃるんですもの。向こう五、六件先でも家に誰かいるのはうち位でしょう？　この周りには家自体、少ないんですし」

後ろを振り向いた顔はトロンと蕩けている。元々、目尻の下がった優しい顔つきをしているのだが、それに拍車がかかっている。目の緩み具合は零れ落ちそうな程。眉も悩ましげに八の字を描いている。上気した顔は成熟した女のそれだ。

第三章　兄嫁の手ほどき

「それはそうですけど……」

兄嫁の色気に、常識的な考えが霧散する。馬鹿らしくなっていく。今まで問題は無いのだから、これからも起こる筈はない。杞憂に心を砕くより、兄嫁との情事に耽溺した方が良いではないか。

誠二と先輩恋人との関係はまだ健在である。心身の交流を深め、二人の仲はすこぶる良好だ。

しかし、兄嫁との肉体関係は終わっていない。兄の不在が続いている事による人肌恋しさからなのだろうが、義弟は時々誘惑され、彼はそれに乗っていた。

涼子はこの事を知らない。心を許している男性が他の女性、しかも義理とは言え姉と、更に言えば人妻と多情に耽っていると分かれば悲しむだろう。

負い目は感じる。だが、だからと言って恩ある優子を無下にする気にもなれない。

幸い、優子は節度を期待できる人物であり、また涼子と言う恋人がいる事を承知している上で迫ってくるのだ。元々、世間に許される関係でもない。だから、過度にのめり込む事はないだろう。そう考え、誠二は秘密の浮気を繰り返していた。

「ンンッ！　縁側だけど、お日様の光を浴びながら裸でするのって、思った以上に刺激的で……癖になりそう……」

誠二も同感だった。彼もスキンも着けていない。自分の全てを剥き出しにして義姉の粘膜を擦っている。

とは言え急な来客に備えて、二人は直ぐ着れる服を傍に置いていたが。

容赦なく照りつける陽の光。それを全身に浴びながらのセックスは、室内でするのでは味わえない爽快感を生み出している。

湿ってじっとりした空気。煩い位に響き渡る蝉の声。他に誰もいない空間は、常識からの開放感も感じさせてくれる。

高い塀があると言っても、ご近所は留守であると言っても、ここは殆ど外なのだ。誰かに見られるかも知れない。そのスリルも心地良かった。

誰かが近づいてきたら気付ける様に、気を張り詰めながらセックスに耽ると言うのも奇妙な程に心身を昂ぶらせる。

それにしても。夏の日差しを浴び、しっとり煌く白い肌が艶かしい。汗と体液の匂いが、男女の情交をしている事を強く自覚させ、肉棒がより硬くなる。

眼下に見える背中の向こう側では肉メロンがぶるんぶるん揺れている。力の方向に気を遣えば二つ揃って同方向に。がむしゃらに尽けば左右それぞれが不規則に暴れるのだ。たわわな果実が自分の腰使い一つで翻弄されている。

「んっ、そろそろ……出しますよ、義姉さん」
魅惑的な光景が、兄嫁の女体を支配する誠二の射精欲求を加速させていた。
「いいですよ、そのまま膣内で射精しても。避妊はしていますから。どうぞ、この青空の下で膣内にドクドク出して下さい……！」
きっと、夫である兄でも妻と全裸で野外セックスをした事は無い筈だ。こうまで膣内射精をおねだりされた事があるかさえ怪しい。胸の奥がゾクゾクする。
左手の薬指を見れば、嵌められたリングが鈍く輝いている。それは誠二が購入した物だ。秘め事の時には、彼女はそれを嵌めてくれる。そうして、一時だけとは言え、愛らしくてふしだらな妻になってくれるのだ。
「いきますよ、優子さん、出しますっ！」
最後に強烈な突きを見舞った。子宮口だけでなく子宮を揺らすつもりで。
そして引き抜く。
陽の下で淫らに輝く彼女の全てを目に収めて瞬きをしない。
兄嫁の肉芯をこそぎ、彼女の女蜜で濡れそぼった勃起を猛烈な勢いで扱く。
白い閃光が迸った。
びゅくびゅくと放たれた生臭い体液が、白い裸身に降り注ぐ。

第三章　兄嫁の手ほどき

「んンッ！」

兄嫁は四つんばいのままで受け止める。

ほっそりとした背中へ、ドンと膨らんだ腰に、巨尻に、義弟のＤＮＡを浴びせる。横に移動し、重力に引かれて釣鐘状になっている肉メロンにかける事も忘れない。

白濁は非常に粘着質だ。大地の引力にもなかなか屈しない。兄嫁の肉体にしつこくへばりついている。肌を伝って落ちていく場合でも、未練がましく這い跡を残している。落ちる速度も遅い。

「身体に一杯……誠二さん、誠二さんの見ている物を写真に撮って下さい……」

「え、あ、はい」

断る理由が思い浮かばなかった。誠二は精液に塗れた兄嫁の姿を、傍らに置いてあった彼女の携帯電話に備わっているカメラ機能で保存した。

カシャリ、カシャリと撮影音が連続で生まれる。義弟の精液で化粧を施された兄嫁は、四つんばいのまま、破廉恥な被写体であり続けた。

「ふぅ……本当に避妊しているんですよ？」

ひとしきり撮影が終わると、彼女が言った。

「信じてますよ。でも、無性にこうしたくて。大丈夫、まだまだ出来ますから」

虫除け機械の横に置いていたウェットティッシュを使い、兄嫁の全身を清拭しながら誠二は弁明した。

「それなら良いですけど……わぁ、こんな風にされてたんだぁ。自分を後ろからは見れないですからね。新鮮です。初めてのお外だった訳ですし」

早速、画像を呼び出して鑑賞する優子。

「こう言うのがあれば、一人でも平気な気がします。……誠二さんには恋人さんがいますから――」

ドザッ。

いつの間にか。門から庭に入った所に人がいた。片倉涼子だ。白衣に聴診器といつもの姿だった。足元に乳白色の買い物袋が落ちている。輪郭は角張っている。

彼女は滑稽な位に目を剥いていた。全身がわなわなと震えている。信じられない光景を見たと、身体が無言で絶叫している。

「せ、先輩……」

一糸纏わぬ男女。近くには、湿ったティッシュだけが溜まっている透明なゴミ袋。周囲に漂う生々しい男女の臭い。言い訳のしようが無い。

蝉の声だけが満ちる静寂の中、先に立ち直ったのは涼子だった。

「アイスを買えたから一緒にと思って……落として自分を知らせるつもりも、邪魔するつもりも無かったのだが……水を差して済まなかったな……」

砕け口調と普段の男口調が混合している。大分動揺している。

「まぁ！　それは、ショッピングセンターカウガール内にある七十七堂のアイスクリームですか？　あそこは大人気で、朝一番で並ばないと今の時間に買う事は出来ないですよね」

優子は傍に用意していた花柄ワンピースを着ると、朗らかに続けた。

「お茶の支度をしますね。どうぞ上がって下さい」

「はぁ……」

生返事をする涼子。気の抜けた彼女の声を、誠二は初めて聞いた。

三人は縁側に腰掛け、涼子が買って来たカップアイスを無言で舐めている。白のTシャツに黒いハーフパンツ姿の誠二が真ん中で、涼子と優子が彼を挟んでいる。

誰からも言葉が出ないものの、何故か優子はいつも以上にニコニコしている。涼子とは初対面の筈で、あんな事があったのに全く気後れしていない。

涼子は硬い無表情。間の誠二は、好物の高級品を口にしていると言うのに、全く味

が分からないと言う具合だ。

「今日は特に暑いですね。今朝のニュースでは真夏日になると言ってましたけれど、予報が当たったんでしょうね。うちには温度計がないので分かりませんが」

そう言いながら、ワンピースの片紐をずらした。内部に納まっていた肉メロンの上半分がむちっと露出する。

ただでさえ気まずいと言うのに、これ以上何を。誠二がそう思った矢先に。

「あ～んっ……」

顎を引いて下を向くと、兄嫁は口を開けた。口内に溜め込んでいたアイスをねろ～っと肉果実に垂らす。そして――。

「やだ、胸に零しちゃいました。あぁ、どんどん溶けて……服が汚れちゃう……そうだ、誠二さん、舐めとってくれますか？」

喜色満面で言ってきた。

「あ、早く早く、早くしないと服が汚れてしまいます」

両腕の上腕を内側に寄せた。何もしなくともたわわな肉メロンがせり上がり、熟れ具合が強調される。その状態で彼女は身体を揺すりもする。圧縮されて膨らんだ肉果がフルフル揺れた。

固体と液体が混ざった白いアイスが、深いあわいに引き込まれたかと思うと、そこから溢れ出す。表面張力の均衡が今にも破られ、肉メロンに白い筋ができそうだ。

この様な誘惑は初めてだった。だが、若しも二人きりであったなら、一もニも無く舌を突き出しながらかぶりついていた。

しかし、今は恋人の目の前なのだ。しかも、浮気現場を目撃された直後である。おねだりに応えるべきではない。そう心が主張する。

けれども、勝手に身体が動いてしまう。兄嫁が用意した氷と水が入ったグラスをどけて、吸い寄せられる様に顔が近づいていく。

何度も心身を触れ合わせた結果、彼女に逆らえない身体になってしまったのかも知れない。

「あはぁ、くすぐったい……いいわ、誠二さんその調子」

顔を突っ込み舌で舐めとる彼の頭を、彼女が優しく抱きかかえる。さながら、自分の子供に授乳する母親である。

やり心地が良い。舌に伝わる肉メロンの柔らかさ。仄かに香る甘い体臭。汗腺が汗を噴出しているが、その味も匂いも不快でない。誠二は涼子の存在を忘れて、一心不乱に舌を這わせた。

「ありがとう。助かりました」
アイスは全て拭えたものの、代わりに義弟の唾液でベトベトになっている。
それが分からない筈はないだろうに、気にしている様子は全く無い。嬉しそうにしている。その笑顔はほうっと心が温まるものだ。
「おい、誠二」
強張った涼子の声。目の前で浮気した恋人は一瞬で我に返った。数秒間、現実逃避の硬直をした後、覚悟を決めて恐る恐る振り返った。
「く……く、口元が汚れているぞ」
全然予想していない台詞だった。言葉の意味が分からず、唖然とする。
一方、涼子はそう言ったや否や瑞々しい唇を彼の唇に押し付けた。
「しょ、しょうがない奴だな、まるで子供じゃないか」
自分の唇で、彼の上唇と下唇を順に噛む。唇を尖らせて口内に入れ、彼の舌を捕まえる。逃がさない様にきゅっと咥えてジュルジュルと吸い上げる。
「私が綺麗にしてやるからな。何故かと言うと、私がお前のこ、恋人だからだ」
息継ぎの合間に言葉を紡ぎ、喋り終わるとまた唇をつける。両手で顔を挟み、逃げる事も動く事も許さない徹底ぶりだ。

唇だけでなく口周辺も、更には頬も顎もぺろぺろ舐める。温かくて柔かい舌が無骨な顔を舐めて回る。

吐く息が短くて荒い。彼女の唾液が混ざった吐息がかからない瞬間が無い。彼の顔は、どこもかしこも彼女の体液でべちゃべちゃである。

「ふぅ……これ位で良いだろう」

年上の恋人は満足気に呟いた。

「まぁ、誠二さん、興奮してるんですね」

いつの間にか再び全裸になっていた優子が、誠二の下半身に縋りついた。ハーフパンツも下着も脱がせると、ギンギンに硬化した勃起が飛び出た。

義姉は義弟の恋人に流し目を送った。酷く挑発的な目だった。

そして、その女性の恋人をパクリと咥えこんだ。

馴染み深い温もりとぬめりに襲われた。兄嫁は、じゅぷじゅぷと自身の唾液を飲み込みながら、窄めた口を往復させて陰茎を擦り上げる。頭を振りながらしているので、髪がぱらぱらと舞う。何本かの髪は汗の湿り気で額などに貼り付いている。

時々、上目遣いで誠二の様子を確認しながら、兄嫁は口奉仕を続ける。時折、彼の背後にも目を向けた。その先には涼子がいる筈だ。

恋人の目の前で兄嫁にしゃぶられていると思うと、妖しい背徳感が湧き起こり、より濃密な快感を覚えてしまう。

見えない口内では、舌がうねうね動いている。肉鰓と皮の間に入り込み、内側に力を込めてねちっこく舐めてくる。

エラに舌を置いたままで吸引もされた。すると、腰から一気に力が抜けて、思わず前のめりになってしまう。涼子が見ている前でみっともない緩み顔になってしまう。

「出したい時に射精して良いですからね。全部、飲ませて貰いますから」

誠二にではなく、その背後に目を向けていた。

「誠二の精液は私のものですっ」

優子が纏わりつく場所に、涼子が割って入ってきた。

顔を埋めて、絶頂間際で引きつっていた陰嚢を舌の上に乗せる。

「本当にもう出そうなのだな……だが、私に飲ませたくなる様にしてやるぞ」

舌で濡らした精袋をはむっと口に含み、口内でねろねろと舐め回す。

内部の球体を探り当てると唇で包み込み、皮越しに舌で擦る。舌の愛撫に合わせて、頬がもごもご動いている。

「っ……先輩、それっ……効くっ……そんなのどこで覚えたんですか……！」

兄嫁にもされた事の無い淫らな性技だ。

「私だって、恋人が出来ればこう言う事も勉強するぞ。ふふ、効果覿面か。喜ばしいな。ほら、私に射精したくなってきただろう？　私が愛しくなってきただろう？」

上気した顔の、唇の端を吊り上げる笑みは色っぽい。

恋人の為にと、不慣れな分野で努力してくれている事実が嬉しい。彼女が自分の家で、セックス関係の映像メディアを鑑賞する姿や、雑誌なり本なりを読む様子を想像すると興奮が増す。若しかしたら友人の猥談を聞いているのかも知れない。

「先輩っ！」

叫んだ刹那、白濁が開放された。

優子が息継ぎの為に口を離し、それを見逃さなかった涼子が先端を独占しようとして、口を開けた時だった。

眼鏡をかけた端整な顔が、粘液の放出をまともに受け止めさせられた。

眼鏡のレンズに、汗が浮かぶ額に、興奮で赤くなった頬に、恋人に尽くした口に、びゅびゅっとかかる。

「んっ……眼鏡に……いつもかけている私の眼鏡にドロドロの精液が……はぁあ、熱い……匂いがキツくてクラクラする……」

瞼が下り、睫毛がピクピク揺れている。うっすらと淫蕩な笑みさえ浮かべ、恍惚とした様子で精液を顔で受け止めている。

「涼子さんっ、涼子っ！」

理知的な女性が、自分の体液を喜んで浴びてくれている。

彼女の姿に興奮し、誠二は自分の勃起を利き手で握った。猛烈な勢いで扱く。狙いが外れない様、空いている手で彼女の頭を押さえもした。

肉棒は、持ち主に応えて断続的に膨らんでは精を吐き出す。その度に、精液の版図が広がる。辺りに籠もる精臭が濃密になっていく。それが数分続いた。

「ぁあ……誠二さんの精液がこんなに……」

濡れた台詞は兄嫁のものだった。涼子の顔にすっと近づき、子犬の様に舌を突き出した。白の雫をペロリと舐めとる。

「んっ……んぐんぐっ……濃厚です……胸が熱くなってきます……」

頬をもごもご動かしながら、そんな事を呟く。じっくりと味わっているのだろう。

「だめです、これは私のです。誠二が私を選んでかけてくれたものなのですから」

涼子は眼鏡のレンズに付着した粘っこい雫を指で掬い、口に運んだ。やはり頬が動いた。喉が鳴るまでの時間は優子よりも長い。しかも一度だけでなく二度三度と繰り

返した。
「独占は酷いです」
咎められても、義姉は行為を止めない。涼子の顔をぺろぺろ舐めて義弟の精を求め続ける。
兄嫁と恋人が、同じ男の粘っこい体液を堪能している。
涼子の顔から白濁があらかた消えると、優子が彼女を押し倒した。手で頬を挟み、強引に唇を奪う。
「んちゅっ、ちゅるっ、やっぱり誠二さんの味がします……」
舌をねじこみ、口内を舐め回しているらしい。
「困りますっ……誠二の前で、女同士とは言えキスだなんて……んンッ……！」
抗議する涼子。優子は取り合わない。彼女は力づくで引き剥がそうともした。しかし、のしかかられているだけに分が悪い。徒労に終わってしまう。
「んぁっ……駄目ですってば……駄目なのに……」
優子は涼子の下半身に手を伸ばし、器用に露出させた。涼子が驚いた隙を突いて上半身もはだけさせる。そして、開閉する肉丘の間に中指を差し入れて動かした。
徐々に涼子の吐息が熱くなっていく。彼女も優子に同調し始めた。ちゅるると言う

吸引音が二種類に増える。彼女も優子の口を吸っているのだ。口で行われる唱和に、下半身で奏でられる粘着質の水音が重なって空に溶けていく。

「ぷはぁっ……良い子ですね……誠二さん、彼女はそろそろ欲しいみたいですよ」

肉洞から指を引き抜き、彼の目の前で広げて見せた。人指し指の腹と親指の腹に塗りたくり、数回広げて見せもする。

「ほら、ここですよ。ここに誠二さんのを」

優子は涼子の背後に回り、上体を起こさせ、後ろから左右それぞれの土手に人指し指をあてた。彼が凝視しているのを確認すると、肉土手を左右にくぱぁっと開かせて見せ付ける。

肉土手の奥にある、サーモンピンクの入り口である二対の肉丘は緩慢に開閉していた。入り口上部の肉豆はぷっくり膨れてビクビクしている。共に、女蜜で半透明に輝いて生々しい肉の魅力を倍増させている。

肉色の鍾乳洞も丸見えである。こちらもしとどに濡れそぼっている。内部にひしめく女の凸凹はテラテラと輝き、ドクドクと脈動している。

「私のアソコが他人に広げられて……中を誠二がじっと見て……」

白濁をかけられ、それを舐めとられた顔が更に赤くなっている。自分の状態を言葉

で自覚し、自分を昂ぶらせている。
「誠二さん、ほら……」
肉土手を小刻みに開閉させ、合体を誘う兄嫁。
「あなたもお願いして下さい。こう言うと良いですよ……」
そっと耳打ちする。涼子がくなくなと首を振った。
「そんな事言えません……そんな卑猥な言葉など……」
「言えなければ、誠二さんは可愛がってくれませんよ。拒むのなら、わたしが奪ってしまおうと思います。彼の身も心もです」
優子の口調は珍しく強い。
「あなたの目の前だと言うのに、わたしの言う事を聞いて、胸に零れたアイスクリームを熱心に舐めてくれた様子は忘れていませんよね？　それでも出来ないと思いますか？　それとも、心を許した異性を奪われるのがお好きなのですか？」
「いやだ……誠二を取られたくない……」
泣きそうな声だった。涙が出る直前の詰まり声だ。
（処女を捧げた男に下らない捨てられ方をされて……男女関係なんてつまらないものだと思っていた私に、そんな考えは間違いだと教えてくれた……教えて、毎日を一層

豊かにしてくれている……そんな誠二を奪われてまた独りになるなんて嫌だ！）

「誠二……私のここにお前の……お前の硬く勃起したお……お○んちんをくれ……お前に可愛がって欲しくて堪らない私のお……お……お○んこにズブッと挿れて手荒に愛してくれ……！」

誠二は涼子の髪を優しく漉いた。だが。

「えーと、先輩のどこに俺の何を挿れて欲しいんですって？」

「くッ……意地悪め。人を嬲って……お前はそう言う所もあるのだったな、こっちは必死だったのに……」

そうぼやくも、満更でもなさそうだった。

「お前の雄雄しいお○んちんだ！　その立派なお○んちんを、疼ききってぐしょぐしょの私のお○んこにブッスリと挿れて、子宮口をズンズン突いてくれ！」

はしたないおねだりを強要した恋人が、最後に残っていた衣服であるTシャツを脱いで前面にのしかかった。

涼子の背後にいる優子は義弟の恋人の身体を後ろに倒させ、結合を助けている。

「見ていて下さい。入りますよ」

広げられた肉の亀裂に、パンパンの亀頭をくぐらせる。

「良かったぁ……入ってくる……」
溜息交じりの声が漏れた。涼子の呟きだ。
誠二は体重を勃起に集中させている。身体中の重みを傾けて亀頭を埋没させる。
広げられた入り口を過ぎると、馴れ親しんではいるが全く飽きない肉の圧迫感がやってくる。
鈍い角度で広がる亀頭のどこもかしこも、境目の肉段差も、血管浮き出る陰茎も女肉の凹凸にびっちりと包み込まれる。
きつく合わさる肉の凸凹はうねうね蠢いている。根元から引き抜いてやると言わんばかりに奥へ奥へと引き寄せる。愛液のヌメリがその力と結託し、誠二の背筋を甘く痺れさせ、原初的な性行為以外の事を考えさせなくする。
「あぁっ！　一番奥に当たった……」
先端が最奥に至った時、涼子の裸身がビクンと跳ねた。
「ふふ、子宮口が弱いのかしら。誠二さん、もっと突いてくれますか？」
そう言うと、優子は二つの掌を肉山に移動させた。中央でツンと立っている肉の頂きを摘む。愛液でぬめる人指し指の腹と親指の腹でコシュコシュ擦り上げる。
「ふぁあぁ、駄目、入れられてるのに、乳首もそんな風にされたらッ！」

「敏感なのですね。誠二さんに開発されたのかしら。いずれにしても、いかにもセックスとは無縁そうな研究者と言う感じの人なのに、こんな可愛らしい反応をしてくれるなんて愛らしい女性です」

優子は涼子に口付けをした。目を細め、慈しむ様に深いキスをする。涼子も次第にうっとりと調子を合わせ始める。キス好きなだけに、何度でも陶酔してしまう様だ。

肉穴の動きが活発化した。男から精子を奪い取ろうと言う動きだ。

男の威力で抵抗し、誠二は彼女の最奥を何度も突き上げる。

肉のぽっちを弄られながらキスをされている涼子が、突かれる度にくぐもった甘い呻き声を上げる。その時には、細まった目が決まってピクピクする。

普段見るセックス時の様子とはまた違った痴態である。誠二は暫し魅入った。と、涼子が瞳でこちらを向いた。潤んだ瞳で何事かを訴えている。肉穴の中がキュッ、キュッと締め付けられた。不随意的な動きと言うよりも意識的な物だ。

「すみません。続き、しますね」

それをおねだりと判断し、誠二は腰振りを再開した。すると、涼子の目が満足そうにたわんだ。

兄嫁とサンドイッチする格好で、誠二は涼子の肉洞を抉る。

脚を前方に投げ出し、義姉のむっちりとした尻肉を握り締め、二人の女性を手前にぐいぐい引き寄せる。

そうして、上半身を波立たせる。背中を反らせば挿入が深くなり、前傾すれば浅くなる。そんな擬似的な出し入れを繰り返す。腰に捻りを加え、女穴全体を擦り上げてマンネリにならない様に工夫もする。

誠二の巧みな肉棒奉仕と優子の乳首弄りキスに恍惚としながらも、涼子は時々、目線を下げて誠二との結合部の様子を見詰めた。

ひっきりなしに出入りする男根の根元。自身の中から、膨らみきった肉の段差により掻き出される体液。びちゃびちゃの勃起と男女の合わせ目。紅潮した顔でうっとりと凝視する。

そして、年下の恋人と目と目で抱き合う。

「……っ……先輩、涼子さんっ……！」

目を動かしていたのは誠二も同じだ。

義姉に乳首を擦られ、同時にキスもされ、それらを全面的に受け入れている彼女の様子。休み無く、離れては合わさり続ける二人の股間。それらの官能を全身で受けて蕩けた顔でいる、少し変わってはいるがとても優しくて繊細な年上の恋人。

いつも理知的な恋人が、殆ど野外セックスと言う状況で多幸感に浸っている。
庭に面した縁側と言う場所で、太陽の光を浴びながら交わっていると、兄嫁と睦んでいた時にも感じた開放感と爽快感を感じる。彼女も同じなのだろう。
「涼子さん！」
勃起に限界が訪れた。肉棒が甘く痺れて堪らない。最後の膨みを始めている。
恋人は目で頷いてくれた。
誠二は最後の突き入れを行う。一ミリでも、ほんのちょっとでも深く繋がった状態で最後の時を迎えたい！　その衝動のままに、性器同士をぎっちり密着させる。
「ンンッ！」
熱い白濁がドクドクと溢れた。子宮口にめり込んだ状態で。
涼子はギュッと目を閉じ、恋人の奔流を全身で受け止めている。
兄嫁は尚も口責めと乳首責めを継続している。
女の奥所に熱い精液を浴びながら性感帯を刺激されている影響か、肉洞内の蠢きが全く鎮まらない。男だけが持つ精子を搾り出そうとぎゅうぎゅう締め上げてくる。
誠二はそれに逆らわない。分身を包む女肉と結託し、腰を振って精を捧げる。代わりに心身の悦楽を受け取りながら。

やがて。誠二が離れた。引き抜かれた男根は、精を放った白い証と、膣内を往復した透明な証に塗れていた。

肉栓を失った亀裂から、白くて粘っこい男汁がゆったりと零れ出る。

「たっぷり出たな……いつにも増して多いじゃないか」

涼子が静かに微笑んでいる。手を伸ばして自分の中から出てくる白液を指で掬う。指でニチャニチャと弄ぶ。親指、人指し指、中指のそれぞれの指の腹に塗り込めると広げて粘度を見る。ぬとーっと広がる白糸に、唇の端を上げている。

「くんくん……はむっ……んっ、ちゅるっ……匂いも味もまだまだ強いな」

鼻腔の直前まで指を持っていって匂いを嗅ぎ、おもむろに口へ入れる。顔射された後と同じ様に、頬をもごもご動かして味わう。

「んぐっ……はぁ……これで、また誠二の身体で作られた体液が私と一つになるな」

年上の恋人は満足そうに溜息を吐いた。

体験版は以上です。ご鑑賞有難うございました。